



第1章 調査の経過と組織

1. 調査に至る経緯

小郡南原遺跡の発掘調査に至る発端は、小都市都市建設部道路建設課より提出された「下町・西福童 16号線改良工事」に伴う埋蔵文化財の有無の照会（平成27年7月30日 小教文第5048号）に始まる。これを受け、小都市教育委員会が申請地を対象に試掘調査を実施した結果、古代・中世の遺跡の存在が確認された。この結果に基づき、平成27年9月15日付で埋蔵文化財発掘の通知が提出され、協議の結果、220m²について発掘調査を実施することで合意した。引き続いて、同工事の対象地である小都市小郡字堂の前についても埋蔵文化財の有無の照会（平成28年3月23日 小教文第5135号）が提出され、試掘により遺跡の存在が確認された。これを受けて、平成28年4月14日付で埋蔵文化財発掘の通知が提出され、協議の結果、3290.54m²について発掘調査を実施することで合意した。

小郡南原遺跡は平成27年度に現地発掘調査、平成28年度に出土遺物整理作業、平成29年度に報告書作成を実施し、小郡堂の前遺跡3は平成28年度に現地発掘調査、平成29年度に整理作業と報告書作成を実施した。

2. 調査の経過

調査範囲は、道路新設に伴う220m²および3290.54m²である。小郡南原遺跡の現地調査は平成27年10月8日に着手、平成27年10月30日に終了し、小郡堂の前遺跡3は平成28年5月25日に着手、平成28年11月2日に終了した。主な経過は以下の通りである。

【小郡南原遺跡】

平成27年10月8日：重機を搬入。表土剥ぎを開始。
10月13日：南側より遺構掘削を開始。
10月15日：SD01完掘、擾乱の掘削を開始。遺構全体図の作成開始。
10月21日：南側半分の空中写真撮影。
10月22日：反転作業を開始。南側半分の埋め戻しを併行して行う。
10月23日：北側の遺構掘削を開始。北西端で住居状の大型遺構を確認。
10月27日：大型遺構のトレンチ調査により、堅穴状遺構であることがわかる。
10月29日：北側半分の空中写真撮影。
10月30日：完全撤収。

【小郡堂の前遺跡3】

平成28年5月25日：重機を搬入。表土剥ぎを開始。
5月31日：A区北半より遺構掘削を開始。
7月6日：C区南半の表土剥ぎ開始。

7月14日:A区南半の空中写真撮影。
7月18日:C区南半の遺構検出・掘削を開始。併行してA区南半の全体遺構図作成。
8月4日:A区北半の表土剥ぎ開始。
8月17日:C区南半の空中写真撮影、全体遺構図作成。A区北半の掘削作業開始。
8月25日:B区・D区の表土剥ぎ開始。
8月5日:A区北半完掘。B区の調査に着手。
9月12日:B区完掘。D区の掘削作業開始。
9月13日:C区北半の表土剥ぎ開始。
10月11日:A区北半、B区、D区の空中写真撮影。全体遺構図の作成。
10月15日:D区完掘。C区北半の掘削開始。
10月25日:C区北半の空中写真撮影、全体遺構図の作成。
11月2日:完全撤収

3. 調査組織

小郡南原遺跡・小郡堂の前遺跡3における発掘調査に係る組織は以下の通りである。
(平成27・28・29年度)

(概要)

平成27年度…現地発掘調査（小郡南原遺跡）
平成28年度…現地発掘調査（小郡堂の前遺跡3）、整理作業（小郡南原遺跡）
平成29年度…整理作業（小郡堂の前遺跡3・小郡南原遺跡）

(体制)

〈小郡市教育委員会〉

教育長 清武 嶽

教育部 部長 佐藤秀行（平成27年度）、山下博文（平成28・29年度）

文化財課 課長 片岡宏二（平成27・28年度）、柏原孝俊（平成29年度）

係長 柏原孝俊（平成27・28年度）、杉本岳史（平成29年度）

技師 龍 孝明

杉本岳史（平成27・28年度）

嘱託 宮本博喜（平成27年度、現大牟田市教育委員会）

一本賢人（平成28・29年度）

〈小郡市役所都市建設部〉

部長 一本茂治（平成27年度）、肥山和之（平成28・29年度）

道路建設課 課長 倉富義和

道路推進係 係長 永松幸俊



第2章 位置と環境

小郡南原遺跡および小郡堂の前遺跡は、三国丘陵から緩やかに伸びた大きな低台地上にあり、西側に秋光川が流れる。周辺部は低位沖積段丘、氾濫源（後背湿地）を形成し、その低位沖積段丘の東側に幅50m前後の谷が南北方向に入り込み、中州状の地形を形成している。本遺跡は、東の丘陵部から西の秋光川にかけて一段落ちる微高地上に所在する。以下で当遺跡周辺の歴史を概観する。

縄文時代の遺跡は、小郡中尾遺跡、大崎井牟田遺跡があり、押型文土器のほかに、後者では石組み炉が検出されている。

弥生時代の遺跡は、九州横断自動車道建設に伴い発掘調査された小郡正尻遺跡がある。この遺跡では前期末～中期前半に至る住居跡、貯蔵穴、土壤、溝、後期後半から終末の住居跡、溝などが検出されている。小郡野口遺跡では中期前半の土壤、貯蔵穴が検出されている。また小郡・大板木遺跡群では多紐細文鏡が2面、青銅器の鋳型片、銅戈などが見つかり、中期中頃の祭祀土壤から優品の丹塗り土器が出土している。遺構では大型の円形住居跡が検出され、当地域で拠点集落を形成したと考えられる。

古墳時代の遺跡では、前期に大崎小園遺跡があり、外来系の布留式土器を伴う住居跡が検出された。中期・後期の遺跡は近辺では未検出である。

7世紀末には小郡官衙が成立し、官衙に隣接する洪積、沖積台地上には同時期の集落が形成された。小郡前伏遺跡では、郡庁に達する道路状遺構が検出された。小郡正尻遺跡3では弥生時代の旧河川を用水路として再掘削・再利用している。その北側の小郡正尻遺跡1では護岸の杭列などが検出され、周辺の水田開発が窺える。小郡正尻遺跡3では、「南」「北」など記された墨書き土器を含む9世紀前半代の土器が多量に出土している。また僅ながら越州窯系の青磁片も含まれる。

三国丘陵の南側斜面・中腹付近では、横隈狐塚遺跡3、津古中剪遺跡、丸又遺跡群で9世紀前半代の蔵骨器が検出された。蔵骨器は須恵器や土師器の壺・皿などの日常容器を転用し、横隈狐塚遺跡3、丸又遺跡群では青銅鏡が副葬されたが、火葬の際に熱で歪み、鏡式、口径などは不明である。丸又遺跡群や横隈狐塚遺跡5では焼土壙が数多く検出され、火葬遺構との関係が考えられる。

平安時代の三国丘陵上では集落の形成が終焉を迎え、当該期の集落は小郡官衙遺跡周辺の洪積地、洪積地上でしか検出されない。そのため、奈良時代以前の集落と墳墓の領域を超える規模の集落・墓域であることが考えられ、集落と墳墓の関係を考える時には広い視野を持つことが必要である。

西島遺跡3・4区では土壤墓や溝を検出したが、建物は未検出である。遺物は陶磁器の出土量が多く、同安窯系青磁や白磁の割合が高い。このような傾向は大宰府、博多遺跡群でも同様に見られ、12世紀後半から13世紀前半の拠点的集落と推測される。

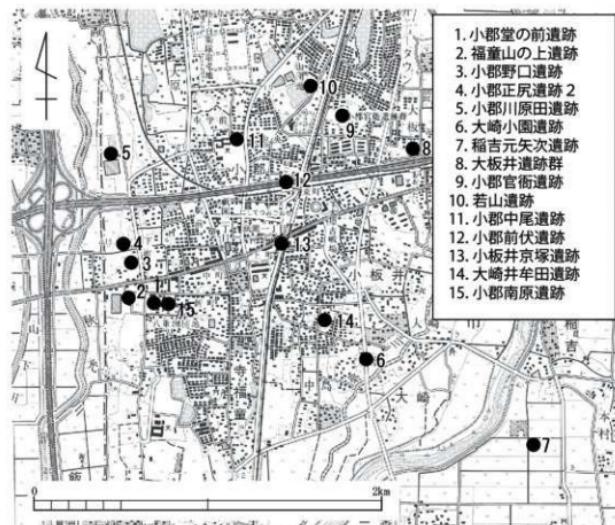
当遺跡から東へ2.5kmには、福吉元矢次遺跡が位置する。遺構は掘立柱建物、土壤、溝、ピットなど多数検出され、この中には鍛冶工房施設を備えており、輪羽口や刀を研ぐ鉄製品など

が出土している。この集落は13世紀後半から14世紀前半がピークを迎える、14世紀中頃以降の集落は現稲吉集落下に存在するようである。

三沢権道遺跡は、13世紀後半～15世紀に至る集落跡である。検出した遺構は土壙11基、井戸2基、溝2条で、調査区西側には南北方向に延びる浅い谷があり込んでいる。遺物は土師器、須恵器、陶磁器、木器、石製品、鉄製品などが出土するが、陶磁器の割合は土師器に比べて低いようである。

三沢歎道町遺跡では方形周溝墓2基などを検出し、主体部は鉄釘が未検出のことから木蓋土壙墓または木釘使用の木棺墓と考えられる。これら中世墳墓は盛土を持っていたと考えられ、同様の形態は津古土取遺跡でも検出している。時期は14世紀中頃～15世紀以降である。

小郡堂の前遺跡は過去に2度、発掘調査が行われている。1次調査の範囲は現高尾看護専門学校の校舎部分にあたり、大溝1条、溝3条、堅穴1基、井戸1基を検出した。遺物は須恵器、土師器、黒色土器、青磁碗である。また大溝からは79点の木杭が出土し、一部は護岸の為の杭列の状態を保っている。2次調査では、1次調査区から南西に約40mの場所で北区が、その更に20m南の位置に南区がある。奈良時代の大溝1条を検出し、土師器、須恵器が出土した。大溝は1次調査で検出したものと同一の溝と考えられる。



第1図 小郡南原遺跡・小郡堂の前遺跡3 周辺の主要遺跡分布図 (S = 25,000)



第3章 小郡南原遺跡の遺構と遺物

今回の調査範囲は中世集落域の端に当たると考えられ、遺構は少なもの、調査区南半では、東西方向に伸びる溝1条、北半では、堅穴状遺構1基が検出された。

(1)堅穴状遺構（第5図、図版2）

調査区北西端で検出した平面隅丸方形状の堅穴状遺構である。溝を切っており、西側は調査区外へと伸びる。水路に隣接していたため、一部未掘である。規模は南北8.52m以上、東西は4.25m以上を測る。深さは、遺構検出面より0.9mを測る。

北東側はテラス状を呈しており、南東側には連なったピット状の落込みが見られる。

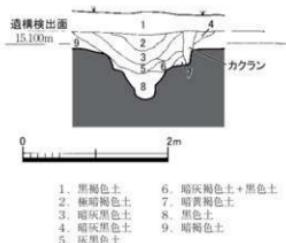
出土遺物（第3図、図版16）

土師器皿と瓦器碗が1点ずつ出土した。

(2)溝（第2図、図版2）

調査区南端で検出された東西方向に伸びる溝である。幅は最大で15.5m、長さ5.75m以上を測る。断面形はV字状を呈し、深さは、遺構検出面より1.23mを測る。西側端は水路に隣接するため未掘であるが、現水路まで伸びていたものと考えられる。

出土遺物はなく、時期不明。

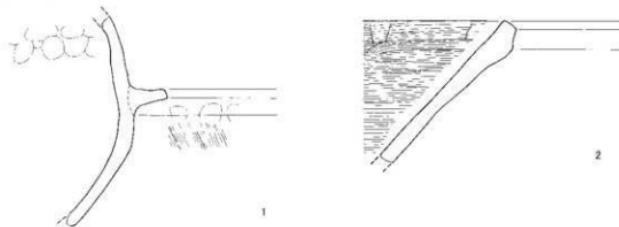


第2図 小郡南原遺跡 溝土層図 (S = 1/60)

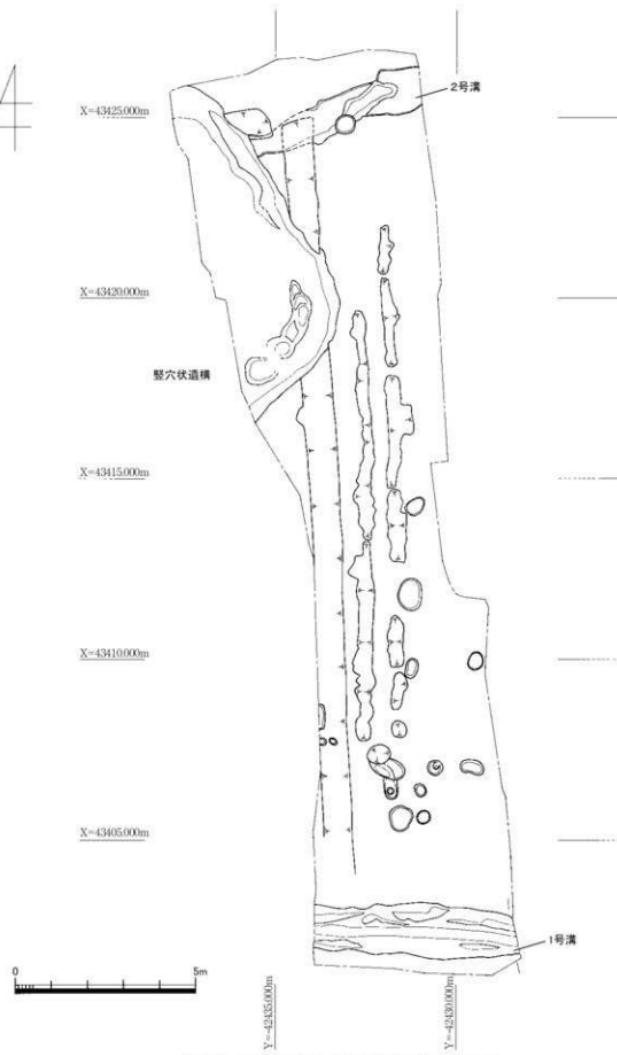
(3)その他の遺構（第4図、図版2）

その他に溝状遺構1条、ピット14基が検出された。溝状遺構は東西方向に伸び、堅穴状遺構に切られている。上面が削平されており、遺存状態が悪い。現況で最大幅1.25m、深さ0.93mを測る。出土遺物なし。

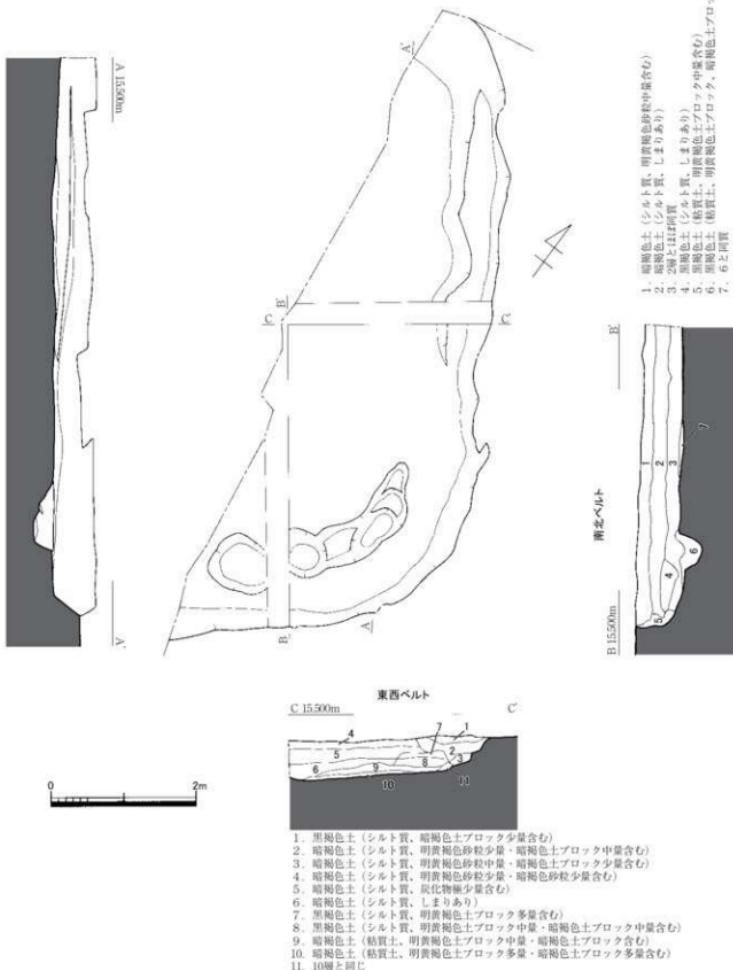
ピットは14基検出されたが、並びをもつものは見られなかった。出土遺物はなく、時期不明である。



第3図 小郡南原遺跡出土遺物 実測図 (S = 1/2)



第4図 小郡南原遺跡 遺構配置図 (S = 1/120)



第5図 小郡南原遺跡 積穴状遺構実測図 ($S = 1/120$)



第4章 小郡堂の前遺跡3の遺構と遺物

小郡堂の前遺跡では、A～D区の4区画で調査を実施した。以下、各区の遺構・遺物について記述する。

1. A区

A区は作業用通路を挟み北区と南区に分けられ、溝6条、土坑2基、ピット3基を検出した。4号溝は南北に繋がる自然流路で、その他の溝5条は4号溝に平行して掘られた人工溝と考えられる。

(1)溝

1号溝（第6図、図版4）

南区の東側に位置し、ほぼ南北に延びる溝である。最大幅1.22m、長さ12.1m、深さは遺構検出面から16cmを測る。北端は搅乱に、南端は2号溝によって切られる。埋土からは堆積状況を確認できなかった。

出土遺物

須恵器片や瓦質土器が出土したが、いずれも小片で図示していない。

2号溝（第6図、図版4）

南区の東南部に位置し、北東～南に向かって湾曲しながら延びる溝である。最大幅1.62m、長さ7.1m、深さは遺構検出面から19cmを測る。1号溝を切り、3号溝に隣接して調査区外まで展開する。土層の堆積状況から、3～5号溝より新しい時期の溝とみられる。

出土遺物

須恵器の小片が多く出土したが、いずれも図示していない。

3号溝（第6図、図版7）

南区の南側に位置し、南北方向に延びる溝である。最大幅0.63m、長さ4.42m、深さは遺構検出面から10cmを測る。北側は4号溝に切られ、南側は調査区外まで延びる。4号溝より古い時期の溝で、最下層が滯水層で、直上の第2層では流水による堆積が確認された。

出土遺物

須恵器や瓦質土器が出土したが、いずれも小片で図示していない。

4号溝（第6図、図版7）

北区から南区にかけ、南北方向に向かって延びる溝である。最大幅約9.4m、長さ36.6m、深さは遺構検出面から25cmを測る。調査では6本のトレンチを設定し、面積の広い2つの区画をa区、b区とし、残りをトレンチ1～4とした。3・5号溝を切りながら堆積しており、この2つの溝より新しい時期に形成されている。



出土遺物（第8・9図、図版12）

第8図1・2、第9図1・3～5は土師器。第8図1・2、第9図1・5は皿で、第8図1は内面に竹輪文と「牛□」（□は「女」か）が記された刻書土器である。第8図2は内面に工具によるミガキが施されている。第9図4・5は壺。第9図2・6～8は須恵器で、いずれも壺。

5号溝（第6図、図版4）

4号溝に平行し、南北に延びる溝である。最大幅約2.0m、長さ19.4m、深さは遺構検出面から54cmを測る。南北ともに調査区外まで延びるが、北区では溝の続きを確認できないため、北東方向に延びると思われる。各土層で最下層に堆積が確認され、最も古い時期に形成されている。

出土遺物（第9図、図版12・13）

11は土師器の皿である。9・10は須恵器の壺身。

6号溝（第6図、図版4）

南区の東側に位置し、北東から南に向かって延びる溝である。最大幅0.6m、深さは遺構検出面から15cmである。北側は調査区北東部で途切れ、南側は溜みから続きは確認できなかった。埋土からは堆積状況を確認できなかった。

出土遺物

なし

（2）土坑

1号土坑（第7図、図版7）

北区西部、標高14.7m付近に位置する。西半部は調査区外に広がり、平面形は歪で詳細不明である。検出長1.20m×0.80m、深さ20cmである。

出土遺物

須恵器の小片が出土したが、図示していない。

2号土坑（第7図、図版7）

北区西部、標高14.8m付近に位置する。検出長0.96m×1.08m、深さ44cmの円形土坑である。

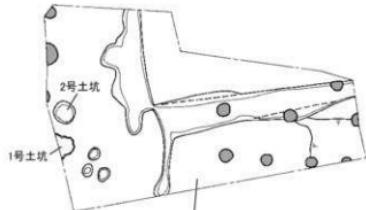
出土遺物

なし

その他出土遺物（第9図、図版14・16）

段落ちから須恵器片が数点出土した。12～15はいずれも壺。

X=43500.000m



X=43490.000m

X=43480.000m

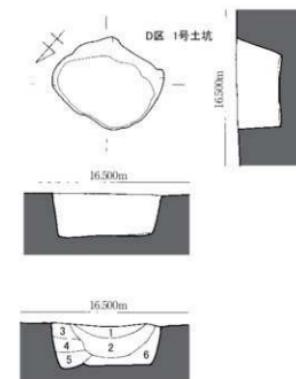
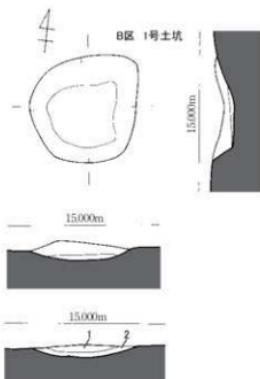
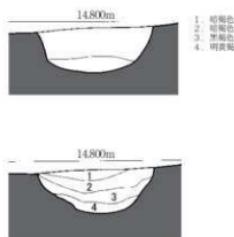
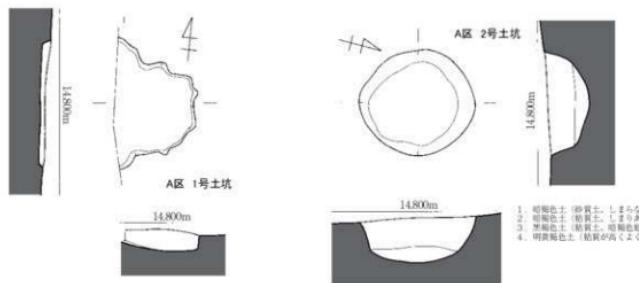
X=43470.000m



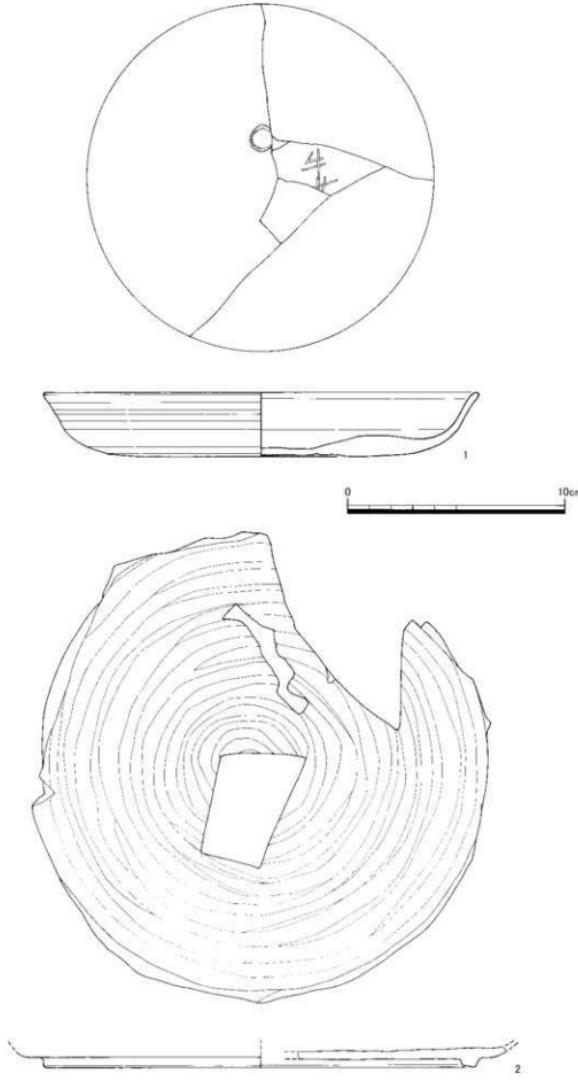
Y=42370.000m
Y=42360.000m

■は建物基礎

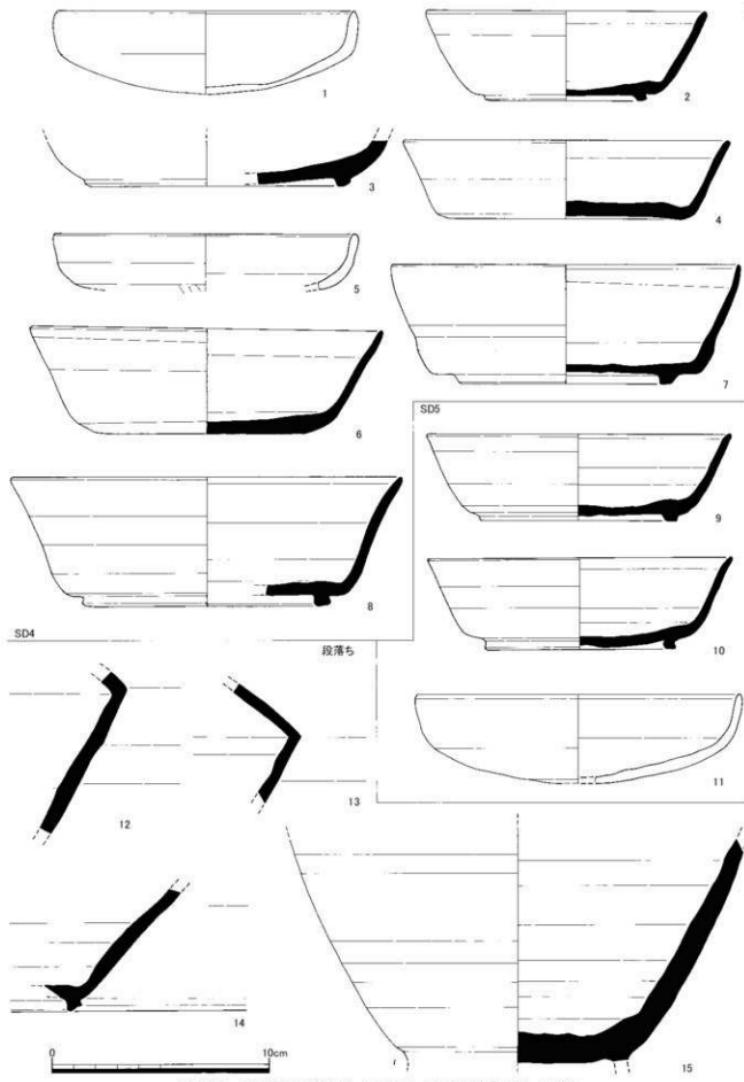
第6図 小郡堂の前遺跡3 A区遺構配置図 (S=1/200)



第7図 小都堂の前遺跡3 A・B・D区 土坑実測図 (S = 1/40)



第8図 小郡堂の前遺跡3 A区出土土器実測図① (S = 1/2)



第9図 小郡堂の前遺跡3 A区出土土器実測図② (S = 1/2)



2. B区

B区では、溝1条、土坑1基、ピット2基を検出した。

(1)溝

1号溝（第10図、図版8）

調査区西側に位置し、南北方向に延びる溝である。最大幅210m、長さ6.42m、深さは遺構検出面から44cmである。後述のC区3号溝と同一の遺構である。第2層で地山の流入による堆積層が確認でき、地山の崩落により廃棄されたと考えられる。

出土遺物（第11図、図版13・15）

1～4は土師器。1・2は皿で、3は壺である。いずれも内外面の口縁部から体部にかけて回転ナデ、底部内面をナデで成形され、底部外縁は回転ヘラ切りを施されている。4は壺の把手。外面は指押さえやナデにより成形され、内面はヘラケズリにより調整されている。5は龍泉窯系青磁の椀。内面に草花文を有する。そのほかにも土師器、須恵器、近代陶器の破片が出土したが、いずれも小片であり図示していない。



第10図 B区 遺構配置図 (S = 1/160)

(2)土坑

1号土坑（第7図、図版8）

調査区南東部で検出した。幅0.98m、長さ0.96mで深さは遺構検出面から20cmと浅い。

出土遺物

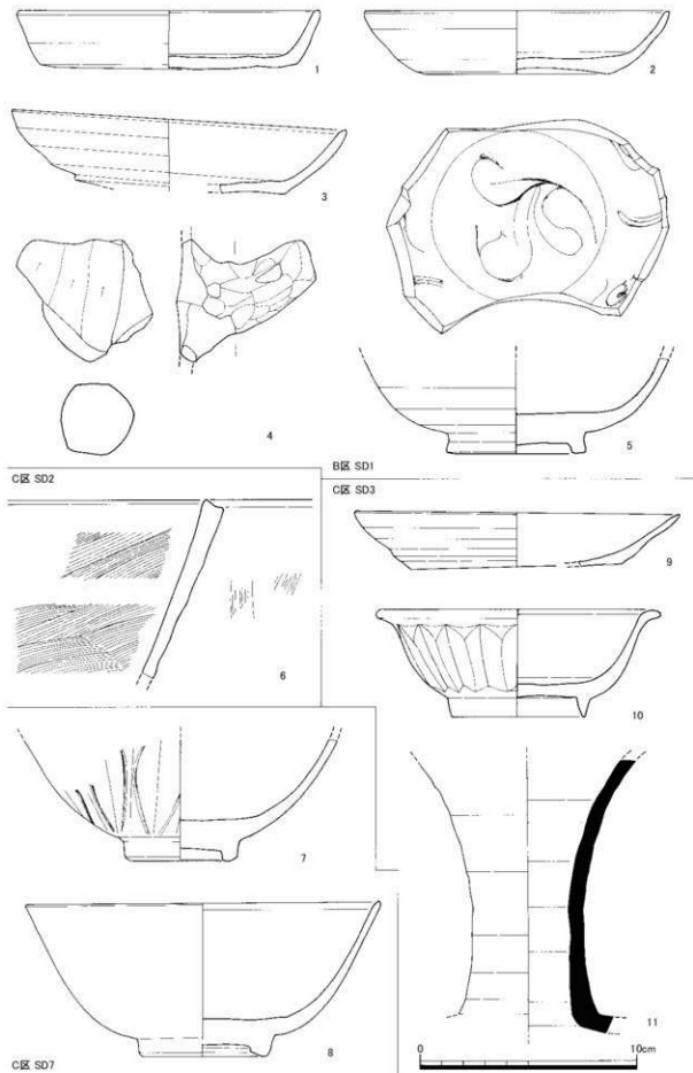
なし

(3)ピット（第10図、図版5）

調査区南東部で2基検出した。1号ピットは1号土坑に隣接し、2号ピットは南東隅に位置する。遺物は出土しなかった。

出土遺物

なし



第11図 小郡堂の前遺跡3 B区・C区出土土器実測図 ($S = 1/2$)



3. C 区

C 区は高尾看護専門学校の駐車場跡で、通路を挟み北区と南区に分けられる。遺構は溝 7 条が検出された。

(1) 溝

1号溝（第 13 図、図版 8）

南区の西部に位置し、北～南西に湾曲しながら延びる溝である。調査区外まで大きく広がるため、全体の規模は不明だが、検出幅 5.63m、長さ 10.13m、深さは遺構検出面から 1.28m である。自然流路と考えられるが、堆積状況は複雑で、別の自然流の存在も考慮される。

出土遺物

近現代の瓦や遺物が多く出土し、青磁の破片なども一部含む。

2号溝（第 13 図、図版 8）

1 号溝に隣接し、北区から南区にかけて北～南西方向に湾曲しながら延びる溝である。最大幅 1.41m、長さ 41.23m、深さは遺構検出面から 44cm である。南区の壁面で木杭の杭列が発見されたことから、人工の溝と考えられる。また北区では 7 号溝と切り合い関係にあり、堆積状況から 7 号溝が先行して形成されたと考えられる。

出土遺物（第 11・17 図、図版 10・14）

第 11 図 6 は瓦質土器の鉢。外面はハケ目で成形後ナデ消しされ、内面はハケ目の痕跡が残る。第 17 図 1～3 は木杭で、第 17 図 1・2 は下部から先端部にかけて加工痕が見られる。その他に土師器や近代陶器、土管も出土したが図示していない。

3号溝（第 13 図、図版 9）

南区の東部に位置し、北東～南方向にかけて延びる溝である。最大幅 2.46m、長さ 16.12m、深さは遺構検出面から 68cm である。2 号溝と同じく人工の溝であり、南は B 区の 1 号溝に続く。下層から氾濫による堆積層が確認でき、その後廃棄されたとみられる。

出土遺物（第 11・17 図、図版 10・14）

9 は土師器の壺、体内外面はナデで成形される。10 は龍泉窯系の青磁碗で、外面に蓮弁の削り出し文様を有する。11 は須恵器の長頸壺の頭部で、内外面共に回転ナデで成形される。

4号溝（第 13 図、図版 9）

南区の南西部、2 号溝と 3 号溝の間に位置する。最大幅 0.40m、長さ 5.84m、深さは遺構検出面から 24cm である。埋土から堆積状況は確認できなかった。

出土遺物

なし



5号溝（第13図、図版9）

南区の南東部に位置する。遺構検出面からは片側の上端しか確認できず、規模・断面形は不明。内側には6号溝が位置するが、埋土から切り合い関係など堆積状況は確認できなかった。

出土遺物

なし

6号溝（第13図、図版9）

南区の南東部に位置する。北東から南西方向に延びる溝で、最大幅1.22m、長さ5.23m、深さは遺構検出面から20cmである。埋土から堆積状況は確認できなかった。

出土遺物

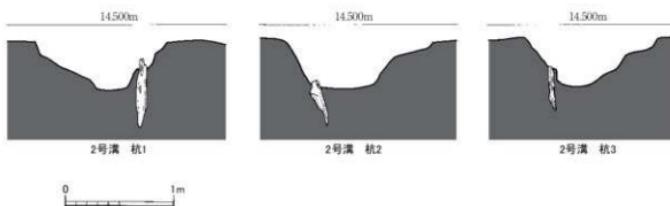
なし

7号溝（第13図、図版10）

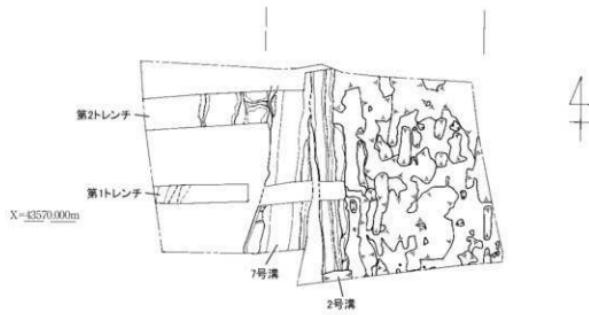
北区の中央に位置し、ほぼ南北に延びる溝。最大幅2.42m、長さ7.44m、深さは遺構検出面から88cmである。2号溝と切り合い関係で、7号溝が先行する。土師器が多く出土し、青磁や須恵器の破片も一部含まれる。

出土遺物（第11図 図版15）

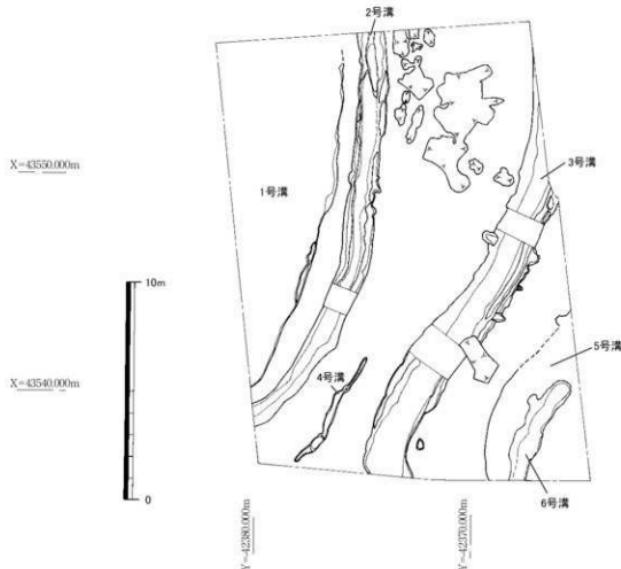
7・8は龍泉窯系の青磁碗。7は外面に鏡のない蓮弁文を有する。



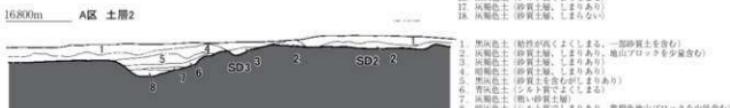
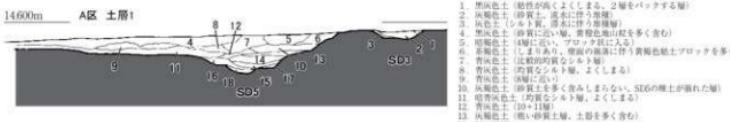
第12図 小郡堂の前遺跡3 C区2号溝木杭断面図 (S = 1/40)



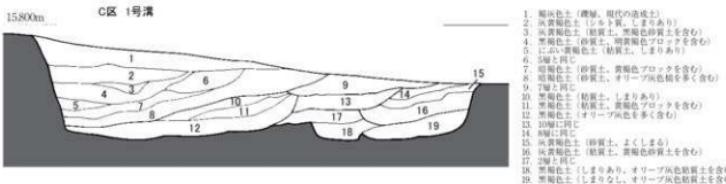
X=43560.000m



第 13 図 小都堂の前遺跡 3 C 区 遺構配置図 (S = 1 /200)



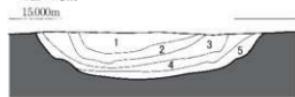
第14図 A区 溝状遺構土層断面図 (S = 1/60)



第15図 小郡堂の前遺跡3 C区 溝状遺構土層断面図 (S = 1/60)

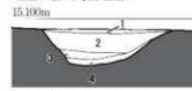


B区 1号溝



1. 黄褐色土 (砂質土層、しまりなし)
2. 明黄褐色土 (シート質、よくしまる)
3. 明褐色土 (砂質土、明黄褐色土を少含む)
4. 黑褐色土 (砂質土、明黄褐色土を多く含む)
5. 黑褐色土 (砂質土、しまりなし)

土層1C区 2号溝 土層1



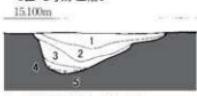
1. 黄褐色土 (砂質土、しまりなし)
2. 黑褐色土 (砂質土、明黄褐色土を含む)
3. 黑褐色土 (砂質土、明黄褐色土を含む)
4. 黑褐色土 (砂質土、明黄褐色砂質土を含む)

C区 2号溝 土層2



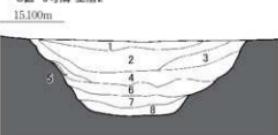
1. にごい黄褐色土 (砂質土、しまりあり)
2. 黑褐色土 (砂質土、にごい黄褐色土を含む)
3. 黑褐色土 (砂質土、2くしまる)
4. にごい黄褐色土 (砂質土、明黄褐色土を含む)
5. 明褐色土 (砂質土、しまりなし)

C区 2号溝 土層3



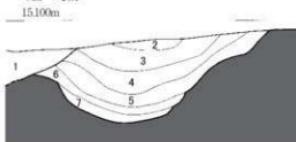
1. 切削土 (砂質土、2くしまる)
2. 切削土 (砂質土、明黄褐色土を含む)
3. 切削土 (砂質土、しまりなし)
4. 混合土 (砂質土、明黄褐色土を含む)
5. 混合土 (砂質土、しまりなし)

C区 3号溝 土層2



1. 黄褐色土 (砂質土、しまりなし)
2. 黄褐色土 (砂質土、にごい黄褐色土を一部含む)
3. 黄褐色土 (砂質土、明黄褐色土を一部含む)
4. 黄褐色土 (砂質土、2くしまる)
5. にごい黄褐色土 (砂質土、しまりなし)
6. 明褐色土 (砂質土、にごい黄褐色土を含む)
7. 混合土 (砂質土、しまりなし)
8. 塩化リード色 (砂質土、しまりなし)

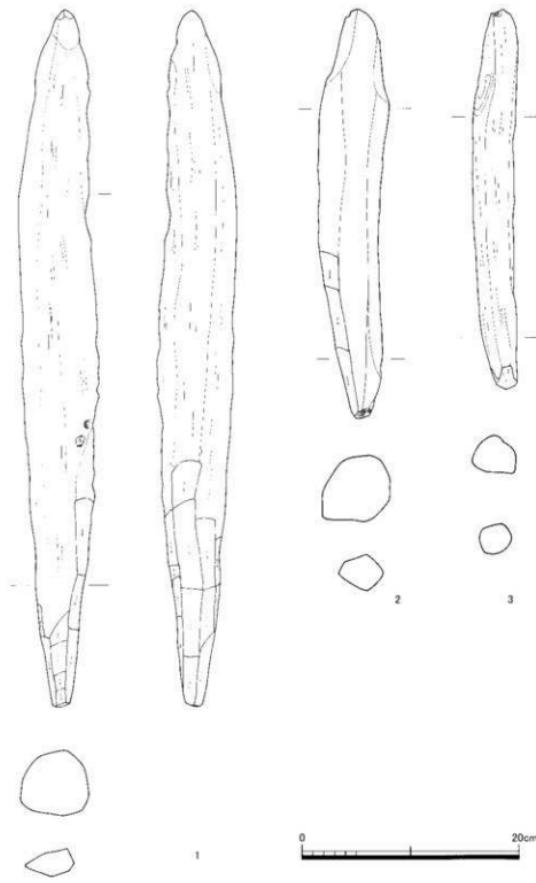
C区 7号溝



1. 黄褐色土 (砂質土、明黄褐色砂質土を少含む)
2. 黑褐色土 (砂質土、しまりなし)
3. 黑褐色土 (シート質、灰褐色土を少含む)
4. 黑褐色土 (シート質、2くしまる)
5. 黑褐色土 (砂質土、浅黄色砂質土を含む)
6. 黑褐色土 (砂質土、明黄褐色砂質土を含む)
7. 黄褐色土 (砂質土、青灰色粘土を含む)



第16図 小郡堂の前遺跡3 B・C区 溝状遺構土層断面図 (S = 1/40)



第17図 小郡堂の前遺跡3 C区木杭実測図 ($S = 1/3$)



4. D 区

D 区は最も北側の調査区で、溝 2 条、土坑 4 基、ピット 6 基が検出した。

(1) 溝

1号溝 (第 18 図、図版 10)

北部から中央にかけて、北 - 南西方向に湾曲しながら延びる溝。最大幅 6.62m、長さ 15.91m、深さ 36cm を測る。北側は表土剥ぎの際に掘りすぎたため、続きを確認できないが、調査区外まで広がると考えられる。トレレンチを 2 本設定し掘削を行った。

出土遺物

なし

X=43630.000m

2号溝 (第 18 図、図版 11)

調査区の南側に位置し、ほぼ東西方向に延びる溝である。最大幅 4.51m、長さ 10.32m を測る。トレレンチを 1 本設定し、深さ 78cm であった。遺物は確認できなかった。

出土遺物

なし

X=43630.000m

(2) 土坑

1号土坑 (第 19 図、図版 11)

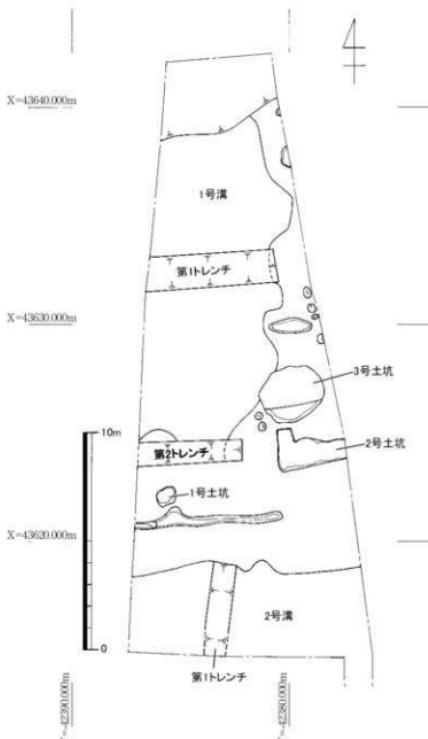
調査区南西部、標高 16.4 m に位置する、 1.02×0.86 m、深さ 41cm の円形土坑である。

出土遺物

小片が数点で、古い陶磁器も含まれていたが、図示していない。

2号土坑 (第 19 図、図版 11)

調査区東部、標高 16.4 m に位置する。平面は長靴形だが、調査区外東側へと延びるため、



第 18 図 小都堂の前遺跡 3 D 区 遺構配置図 (S = 1/200)



実際の平面形・規模は不明である。検出長 2.88m、最大幅 1.82m、深さ 27cm である。

出土遺物

瓦質土器の小片が出土したが、図示していない。

3号土坑（第 19 図 図版 11）

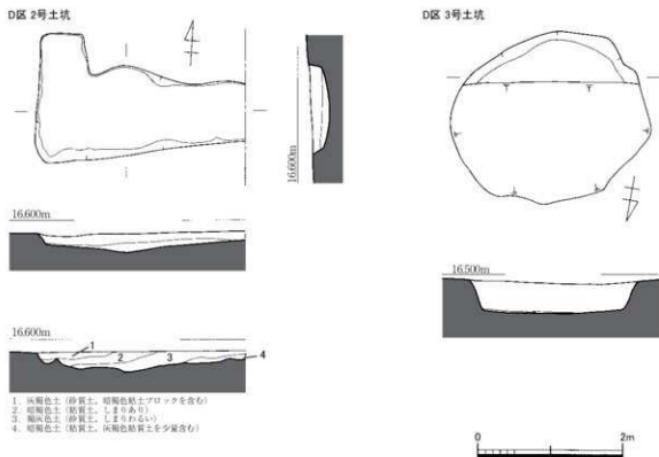
調査区東側、2号土坑の北に隣接し、標高 16.4 m に位置する。2.76 × 2.41 m の大型土坑だが、開発の際に内部をほとんど削られ、南側の僅かな部分のみを留めている。残存部は遺構検出面から深さ 60cm を測る。

出土遺物

なし

(3) ピット（第 18 図、図版 6）

調査区内で、7 基のピットを検出した。いずれも遺物は出土していない。



第 19 図 小郡堂の前遺跡 3 D 区 土坑実測図 (S = 1/60)



D区 1号溝 第1トレーナ

16.400m



1. 黒褐色土 (砂質土。青灰色土を含む)
2. 黒褐色土 (砂質土。青灰色土を多く含む)
3. 黑褐色土 (砂質土。青灰色土を多く含む)
4. 灰褐色土 (粘質土。よくじる)
5. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを含む)
6. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを含む)
7. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを多く含む)
8. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを含む)
9. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを含む)
10. 灰褐色土 (粘質土。よくじる)
11. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを少く含む)
12. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを少く含む)
13. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土ブロックを多く含む)

D区 1号溝 第2トレーナ

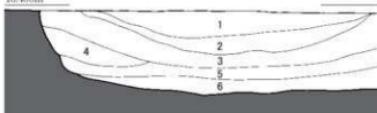
16.400m



1. 黒褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土を含む)
2. 黑褐色土 (砂質土。明黄褐色粘土を多く含む)
3. 黑褐色土 (砂質土。浅黄色粘土を含む)

D区 2号溝 第1トレーナ

16.400m



1. 黒褐色土 (砂質土。2ヶ月以上)
2. 黒褐色土 (砂質土。1ヶ月以上)
3. 黒褐色土 (粘質土。明黄褐色粘土を少く含む)
4. 黑褐色土 (粘質土。しまり)
5. 黑褐色土 (粘質土。浅黄色粘土を含む)
6. 黑褐色土 (粘質土。浅黄色粘土を多く含む)



第20図 小郡堂の前遺跡3 D区 溝状遺構土層断面図 (S = 1/40)



第5章 小郡堂の前遺跡3自然化学分析

今回の分析では、SD 3・土層1の試料4点およびSD 7・土層1の試料1点の計5点のプラント・オバール分析と花粉分析を行い、本遺跡の人工溝の掘削から廃棄までの古植生・古環境の推定を目的とする。

(1)花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。

2. 試料

分析試料は、中世の人工溝と考えられるSD03より採取された2層、3層、4層、5層の4点と、SD07より採取された6層の1点の計5点の堆積物である。

3. 分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.25mmの篩で裸などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、鳥倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。



4. 分析結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉 30、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 24、シダ植物胞子 2 形態の計 62 である。これらの学名と和名および粒数を表 2 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図 2 に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、1 分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亞属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属-マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、アカメガシワ、トチノキ、ブドウ属、ノブドウ、グミ属、ミズキ属、ツツジ科、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、イスノキ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属-ガマズミ属
〔草本花粉〕

サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、ミズアオイ属、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギンギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、キカシグサ属、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亞科、セリ亞科、ナス科、キツネノマゴ、タンボボア科、キクア科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵

以下にこれの特徴を示す。

回虫 Ascaris lumbricoides

回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ $80 \times 60\mu\text{m}$ あり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18 日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

(2) 花粉群集の特徴

それぞれの地点において、花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

① SD03 (2 層、3 層、4 層、5 层)

5 層～2 層においては、花粉構成、花粉組成ともに大きな変化は認められない。草本花粉の占める割合が高く、2 層では 74% を占める。草本花粉では、イネ科 (イネ属型を含む) が



高率に出現し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、タンボボ亜科が伴われ、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属が出現する。4層～2層でソバ属が検出される。樹木花粉では、シイ属～マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、エノキ属～ムクノキの出現率がやや高く、マツ属複維管束亜属が低率に出現する。

② SD07（6層）

樹木花粉が15%、草本花粉が24%、樹木・草本花粉が59%、シダ植物胞子が2%を占める。樹木・草本花粉のクワ科～イラクサ科が極めて高率に出現し、草本花粉では、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、キク亜科、アブラナ科の出現率がやや高く、ソバ属が出現し、回虫卵が検出される。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属～マテバシイ属が比較的多い。

（3）考察

各地点において、花粉群集の特徴から植生と環境の復原を行う。

1) SD03（2層、3層、4層、5層）

イネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、カヤツリグサ科、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水田雑草が伴われる。こうしたことから、周囲には水田が分布していたと推定される。また、4層から上部でソバ属が検出され、ソバの畑作も示唆される。水田や畑の縁辺には、乾燥した環境を好むヨモギ属やタンボボ亜科などの草本が生育していた。参考に行った珪藻分析によると、流水不定性種と真・好止水性種の占める割合が高く、沼沢湿地付着種、湖沼沼澤湿地浮遊性種が出現し、流水性種はほとんど出現しない（表3、図3）。このことから、SD03は河川などの流水域から引水していたのではなく、湖沼や沼澤または池などの止水域から水を引いていたと考えられる。なお、引水も流水性の珪藻が繁殖しないくらいの短期間であったと考えられる。周辺には、シイ属～マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属を主要構成要素とする照葉樹林が分布し、コナラ属コナラ亜属、エノキ属～ムクノキなどの落葉樹も構成要素であった。やや遠方には、マツ属複維管束亜属も分布していた。

2) SD07（6層）

クワ科～イラクサ科が極めて高率に出現し、調査地にクワ科の樹木が生育していたか、カナムグラ、カラムシなどの草本が溝周間に繁茂していたと考えられる。また、イネ属型とソバ属が出現することから、周辺に水田や畑の分布が示唆される。同じく周辺にはコナラ属アカガシ亜属、シイ属～マテバシイ属の照葉樹林が分布する。珪藻分析の結果から、好止水性種で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor* が優占し、安定した浅い水草の生える淀んだ水域が示唆される。



(2) プラント・オパール分析

1. 分析方法

プラント・オパール分析は、ガラスピーズ法（藤原, 1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105°C で 24 時間乾燥（絶乾）する。
- 2) 試料約 1 g に直径約 40 μm のガラスピーズを約 0.02g 添加する。
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6 時間）により脱有機物処理を行う。
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）により分散する。
- 5) 沈底法により 20 μm 以下の微粒子を除去する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーズ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数（試料 1 gあたりのガラスピーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10-5g）を乗じて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山, 2000）。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、スキ属（スキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である（杉山, 2000）。

2. 分析結果

同定されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、スキ属型、タケア科ササ属（ネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型）である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 1、図 1 に示した。各分類群の顕微鏡写真を写真図版に示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

SD03 の 2 層、3 層、4 層、5 層、SD07 の 6 層では、いずれにおいてもイネ、ヨシ属、スキ属型、タケア科ササ属（ネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型）の各分類群が検出されている。SD03 の 2 層では、イネが比較的高い密度であり、スキ属型、ネザサ節型およびメダケ節型はいずれも高い密度である。その他の分類群は低い密度である。3 層と 4 層も概ね 2 層と同様である。5 層では、プラント・オパールの検出量がやや少なく、スキ属型、ネザサ節型およびメダケ節型がやや多い程度で、これら以外の分類群は低密度である。SD07 の 6 層では、さらにプラント・オパールの検出量が少ない。際だった優勢種は認められず、いずれの分類群もやや低い密度である。



3. 考察

(1) 稲作跡の検討

プラント・オパール分析において稲作跡の探査や検証を行う場合、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断の基準をイネのプラント・オパールが試料1gあたり3,000個/gとして検討を行う。

SD03の2層、3層さらに4層では、イネが3,000～3,600個/gと比較的高い密度で検出されている。いずれも稲作跡の判断基準値である3,000個/gに達していることから、これらの層の堆積時にはごく近傍において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。このことから、当該溝は水田に伴う水路として利用されていたものと判断される。5層およびC区SD07の6層では、イネの密度は1,200個/gと低いことから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層あるいは近傍からプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

(2) プラント・オパール分析から推定される植生と環境

ヨシ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケアシ科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の出現状況を検討することで、堆積当時の環境（乾燥、湿潤）を推定することができる。

おもな分類群の推定生産量を見ると、2層、3層さらに4層ではメダケ節型とススキ属型が優勢であり、2層ではこれらに次いでヨシ属が多い。こうしたことから、SD03の4層から2層にかけては、調査地周辺は比較的乾いた環境であり、畦畔や周辺の乾いたところにはススキ属やササ属等が生育していた。2層の時期になると近傍の湿ったところにヨシ属等が生育していたと推定される。5層とSD07の6層の時期も概ね乾いた環境であったと推定される。

(3)まとめ

小郡窓の前遺跡3で出土した中世の人工溝であるC区のSD03とSD07において、プラント・オパール分析と花粉分析を行った。その結果、SD03の2層、3層、4層では調査地で、5層とSD07の6層では調査地周辺で水田稲作が行われており、それぞれの溝は水田に伴う水路であったと判断された。また、SD03の5層以外では、ソバなどを作物とする畑作も営まれていたと推定された。

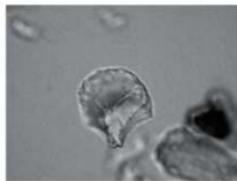
両溝が掘削されて廃棄されるまでの時期の調査地は、概ね乾いた環境で推移し、周辺にはシイ属-マテバシイ属、コナラ属アカガシア属などの照葉樹林の分布も示唆された。SD07の周辺にはカナムグラ、カラムシなどのクワ科-イラクサ科の草本が繁茂していた。SD03は、常時ではなく使用時だけの短期間に池などの止水域から引水して水を流す溝であり、SD07は、淀み溜水しており水草が生育していたと考えられた。



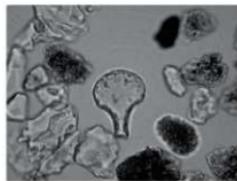
小郡堂の前遺跡 3 のプラント・オバール



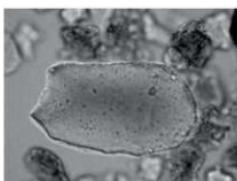
イネ（土層 2）



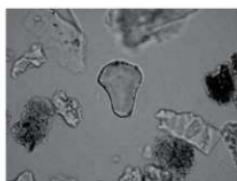
イネ（土層 3）



イネ（土層 4）



ヨシ属（土層 2）



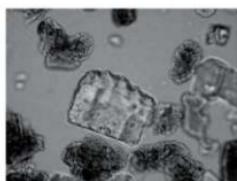
ススキ属型（土層 3）



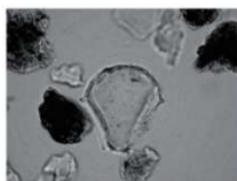
ススキ属型（土層 4）



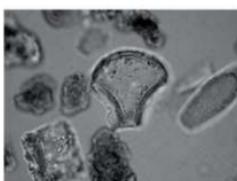
ネズサ節型（土層 2）



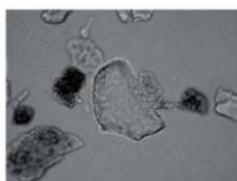
ネズサ節型（土層 4）



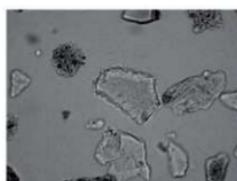
メダケ節型（土層 3）



メダケ節型（土層 4）



チマキザサ節型（土層 3）

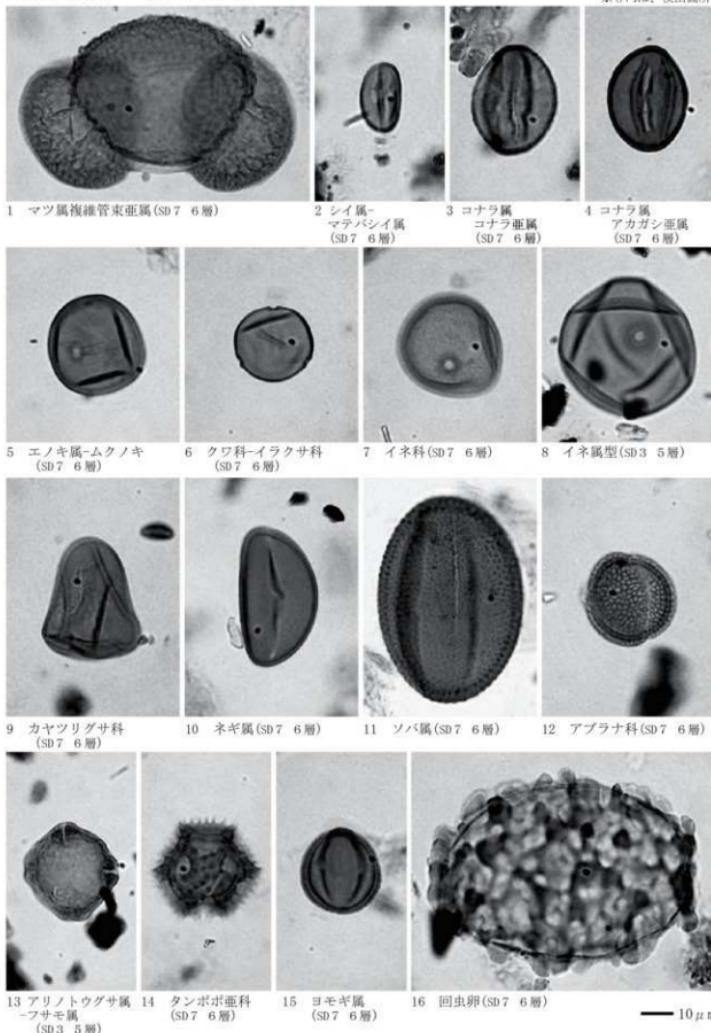


ミヤコザサ節型（土層 3）

— 50 μ m

小郡堂の前遺跡 3 の花粉・寄生虫卵

※○内は、検出箇所



— 10 μm —



第6章　まとめ

本調査では、小郡南原遺跡と小郡堂の前遺跡の3次調査を実施した。南原では溝1条、竪穴状遺構1基を、小郡堂の前遺跡3次調査では溝15条、土坑7基、ピット11基を確認した。溝は自然流路の大溝と、人工的に造成した溝に大別される。小郡堂の前遺跡ではC区1号溝のような大溝で近現代の遺物が多く出土し、現在の開発により埋没するまで存続していたと考えられる。一方で、木杭・土管を出土したC区2号溝のような人工溝では、下層から龍泉窯系青磁碗が複数出土し、いずれも13世紀半ばから14世紀前中頃の時期の特徴を示す。また同じく人工溝から出土した須恵器は、多くが8世紀中頃～後半の様相を示す。したがって人工溝の存続時期は、8世紀中頃～14世紀中頃になると考えられる。前章の自然科学分析の結果から、これらの人工溝は水田に伴う水路と判断され、周辺では稲作を行っていたと推察される。隣接する福童山の上遺跡の自然科学分析でも同様の結果が出ており、今回の調査によってより可能性が高まったといえよう。

市内の中世遺跡では福童山の上遺跡のほかに小郡正尻遺跡が近くに立地しているが、これらの遺跡は11世紀～14世紀の時期の遺物が多く溝状遺構から出土しており、本遺跡と同時期に存続していたと考えられる。奈良～中世にかけて当遺跡の周辺では稲作を営む集落を形成していたと考えられる。



表4 土壌南東面斜傾斜地の遺物調査表

出土遺物	測量番号	測量員名	種類	法線cm (南北)	色調	地質	地況	成形・調整	備考
燈火灰遺構	第04回	16	瓦質土器	既存高:3.6 底:1.9	灰、褐色	壁(5m)以下の灰岩・新 雲母片岩等で成る	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	01/10枚 既存下部に地物付着 既存上部に地物付着
燈火灰遺構	第04回	16	土・鉢	既存高:4.3 底:1.5	褐色	壁(5m)以下の灰岩・新 雲母片岩等や多く含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存上部に地物付着 既存下部に地物付着

表5 千葉県の前田城跡出土鉢類調査表

出土遺物	測量番号	測量員名	種類	法線cm (南北)	色調	船土	地況	成形・調整	備考
AIX SD14a区東部	第04回	1	土・壺	GJ-20.0 高:2.9	褐色	1~2mmの砂粒を少し含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	01/10枚 既存内に竹筒文・明透 字(1)・(2)有り
AIX SD14a区東部	第04回	2	土・壺	GJ-13.6 高:3.0	褐橙色	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	1	土・壺	GJ-13.6 高:3.9	褐色	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	2	土・壺	GJ-12.9 高:4.2	灰白色	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	3	土・壺	GJ-12.0 高:3.7	褐色	2~3mmの砂粒を多く含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	4	土・壺	GJ-15.8 高:3.6	灰・褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	5	土・壺	GJ-14.0 高:3.6	灰・褐色	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	6	土・壺	GJ-16.0 高:3.7	褐色	1~2mmの砂粒を多く含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b区東部	第04回	7	土・壺	GJ-21.2 高:5.0	灰褐色	2~3mmの砂粒を多く含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b1区(西へ)	第04回	8	土・壺	GJ-19.0 高:5.0	灰・灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b1区(西へ)	第04回	9	土・壺・身	GJ-14.0 高:4.0 底:3.0	褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD14b1区(西へ)	第04回	10	土・壺・身	GJ-14.0 高:4.8	褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD15	第04回	11	土・壺	GJ-13.0 高:4.1	褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX 新潟区北東面傾斜地	第04回	12	土・壺	GJ-19.0 高:7.1	灰褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX 新潟区北東面傾斜地	第04回	13	土・壺	GJ-20.0 高:5.8	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX 新潟区北東面傾斜地	第04回	14	土・壺	GJ-19.0 高:5.7	灰褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX 新潟区北東面傾斜地	第04回	15	土・壺	GJ-20.2 高:6.1	灰褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD16北区	第04回	1	土・壺	GJ-14.0 高:5.7	灰褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD16北区	第04回	2	土・壺	GJ-14.0 高:5.9	灰褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD16北区	第04回	3	土・壺	GJ-15.4 高:6.7	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD16北区	第04回	4	土・壺	GJ-15.4 高:6.7	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
AIX SD16北区	第04回	5	土・壺	GJ-14.0 高:6.4	サリーパク	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存 内に茎葉文
CIR SD17区下層	第04回	7	瓦・土器	GJ-8.2	灰褐色	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存 内に茎葉文
CIR SD17区下層	第04回	10	瓦・土器	GJ-8.6 高:5.2	灰褐色	1~2mmの砂粒を少々含 む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存 内に茎葉文
CIR SD17区下層	第04回	15	瓦・土器	GJ-16.4 高:7.1	グリーン	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存 内に茎葉文
CIR SD17区下層	第04回	16	瓦・土器	GJ-15.8 高:6.1	灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存 内に茎葉文
CIR SD17区下層	第04回	17	瓦・土器	GJ-13.1 高:6.1	灰褐色	無鉛釉を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存 内に茎葉文
CIR SD17区下層	第04回	18	瓦・土器	GJ-13.8 高:6.8	灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存
CIR SD17区下層	第04回	19	瓦・土器	GJ-13.8 高:6.8	灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	良好	H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚 H-K-10枚+ナメル一枚	既存

表6 千葉県の前田城跡出土木製調査表

出土遺物	測量番号	測量員名	種類	計測値(cm)	備考
CIRSD17	0117回	10	板	64.2 6.3	—
CIRSD17	0117回	11	板	27.6 6.3	—
CIRSD17	0117回	12	板	35.8 4.6	—